



歯周病は感染症

— 歯周病菌は全身を駆け巡る —

本城 範典



国民保健指導推進委員会委員

6月初めの日本経済新聞に「長寿社会 歯も達者」という見出しがありました。80歳で自分の歯を20本以上残している「8020達成者」が20%を超えたことが、厚生労働省の平成17年歯科疾患実態調査でわかったという内容で、事業計画より5年も早く目標を達成したと締めくくられていました。

皆さんはどう思われますか？

しかし、この記事は日本人の歯の現状を正しく伝えているとは考えにくいのです。

平成11年の歯科疾患実態調査では、日本人の約73%が歯肉出血、歯石沈着といった歯肉に何らかの異常を持っており、特に働き盛り

の中高齢者では90%に達し、年齢とともに重症化して多数の歯を失う原因になっていると報告されました。

日本人の平均寿命が80歳を超える時代になっても、歯の平均寿命は約50年といわれ、高齢者の平均残存歯数は8、9本という少なさで、残念ながら「世界一の長寿国は世界一の歯の短命国」なのです。歯が抜ける最大の原因は歯周病です。

歯周病は口の中に生活する細菌（口腔常在菌）による感染症で、細菌から産生される毒素によって、歯肉や歯を支えている大切な顎の骨が痛みもなく破壊・消失してい

く怖い病気なのです。でも、この病気を正しく理解されている人は残念ですが非常に少ないです。

臨床の場で患者さんに接していると、歯周病が老化現象で加齢的に発症すると考えておられる方が意外に多いことに驚かされます。10年以上も定期検診を続けている患者さんから「私は歯槽膿漏なんですか？」と聞かれてがっかりした笑えない経験も数多くありました。

歯周病菌の特徴は、酸素を嫌う性質を持つ嫌気性菌と呼ばれ、歯と歯肉の間に形成される深い歯周ポケットの中で活動することです。近年の研究では、歯周病を引き起

こす嫌気性菌が唾液や歯肉の血管から血液中に入ると、口腔から全身の臓器に運ばれ、そこで定着・増殖し病気を起こしたり、さまざまに悪影響をもたらすことがわかってきました。

エビデンス（科学的根拠）に基づいて関係があると報告されている代表的なものを挙げると以下のようになります。

呼吸器に感染すると、高齢者の死因に多い肺炎の危険因子になります。介護の現場で問題となる誤嚥性肺炎はその代表といえるでしょう。

循環器に感染すると、動脈硬化や心筋梗塞といった心血管疾患および脳梗塞といった脳血管疾患に影響を与えます。

産科器官（子宮や胎盤）への感染は歯周病菌が子宮収縮を引き起こし、早産や低体重児出産を誘発します。また、歯周病菌の中には女性ホルモンを栄養に活動するものがあり、妊娠中は歯周病に罹りやすく病気が急速に進行します。さらに、妊婦の口腔内環境の悪化は新生児への母子感染という新たな問題も発生しました。

このように、嫌気性歯周病菌が他臓器に悪影響を与えるメカニズムについては、(1)細菌自身を持つている内毒素による直接作用(2)細菌が産生する分解酵素による直接作用(3)歯周病局所で生体作り出す炎症性物質(サイトカイン、プロスタグランジン)による直接作用などが挙げられ、今後さらに治療法の解明が進むでしょう。

一方、歯周病には生活習慣病という側面があり、メタボリックシンドロームなる流行語を生み出した肥満、高血圧および糖尿病との関係が注目されています。

特に糖尿病では、(1)糖尿病患者における歯周病の進行(2)血糖値のコントロールが歯周組織に及ぼす影響(3)歯周病の存在が血糖値のコントロールに及ぼす影響の3つの観点から研究が進められています。

歯周病の患者さんは約9500万人と推定されます。しかし、実際に歯科治療を受けている患者さんは約114万人しかいません。「歯周病であることに気づかない人」や「気づいていても治療しな

い人」が、いかに多いかがわかります。

歯周病を予防したり治療したりすることは、単に歯・口の健康を守るだけでなく、全身の健康を守ることもつながります。正しい口腔清掃の習慣を身につけることは、高齢社会を豊かで快適に過ごすためにきわめて重要であることを歯科医師として皆さんに伝えていきたいと思えます。

代表的な歯周病原細菌

- 成人性歯周炎
 - Porphyromonas gingivalis
 - Tannerella forsythensis
 - Treponema denticola
- 若年性歯周炎
 - Actinobacillus actinomycetemcomitans
- 急性壊死性潰瘍性歯肉炎・妊娠性歯肉炎
 - Prevotella intermedia